HUE RISE
北海道教育大学　へき地・小規模校教育研究センター（通称：へき研センター）
Hokkaido University of Education Research Institute for Remote and Small School Education（aka HUERISE）
令和５年５月２４日発行　第１２４号

へきけんニュース

ホームページ　https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス　kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291　FAX 0154-44-3292

背景は北海道教育大学旭川校

へき地・小規模校の体育授業のフォーラムを開催！
-少人数でも体育授業や体力づくりを活性化するために-

北海道教育大学へき地･小規模校教育研究センター
センター員　中島　寿宏･高瀬　淳也

1. 少人数の体育のメリットを生かした体育授業を目指して

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センターが主催する「へき地・小規模校体育授業フォーラム」が令和５年２月19日（日）に実施されました。

このフォーラムは、令和４年度過疎地のSDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業の一つとして企画されたフォーラムです。今回は、全国へき地教育研究連盟と北海道へき地・複式教育研究連盟の共催企画となっており、文部科学省・北海道教育委員会・札幌市教育委員会の後援を受けたイベントとなっています。

本フォーラムは、過疎地のSDGｓの担い手である教師の資質能力向上のため、特にへき地・小規模校での授業実践に難しさがあると指摘されている体育・保健体育授業をテーマとして、教育現場の実態や課題について情報共有や検討を行うことで少人数学校における体育・保健体育の授業改善および子どもたちの運動習慣の定着・体力の向上を推進することを目的としています。

▲会場の様子

本フォーラムに先立って、本学の玉井康之副学長より開会の挨拶がありました。玉井副学長からは、へき地・小規模学校の教育における課題や、少人数教育特有のメリットの部分についての期待などについてお話がありました。

2．和歌山大学･村瀬浩二教授の基調講演
「へき地･小規模校における体育のコミュニケーションの特徴」
～ルールを工夫し、考える時間を確保する小規模校の体育の特徴～

▲和歌山大学　村瀬浩二　教授

和歌山大学教授の村瀬浩二先生より「へき地・小規模校における体育のコミュニケーションの特徴」というテーマでの基調講演がありました。北海道と同様に少子化の影響による学校の小規模化等、現状の課題などについての説明がありました。

和歌山大学では、2016年度より「教育実践による地域活性化事業」として、へき地・小規模校での教育実習、附属小学校複式学級での実習、和歌山市内小学校でのボランティアを推進しているとのことです。また、村瀬先生が推進している過小規模校・小規模校の体育授業の研究では、小規模学級の子どもたちはお互いの理解が深く配慮があるといった傾向が見られる一方で、暗黙のルールの形成や役割の偏り・固定化といった課題があることが明らかになっていました。さらに、教師はその課題に対してコミュニケーション機会の創出、ルールの工夫、考える時間の確保を試みていることが報告されていました。

研究のまとめとして、小規模校の体育では「参加する全員の参加を意識できる」「誰も切り捨てない」ことによる生涯スポーツ実践への資質が育まれる可能性が示唆されていました。

3．澤辺渉先生の報告
「一人ひとりに目が届き、役割を明確にできるへき地校の体育授業」

▲忠類中学校　澤辺渉　先生

忠類中学校の澤辺渉先生からは、保健体育授業における小規模中学校の取り組みと課題についての発表がありました。

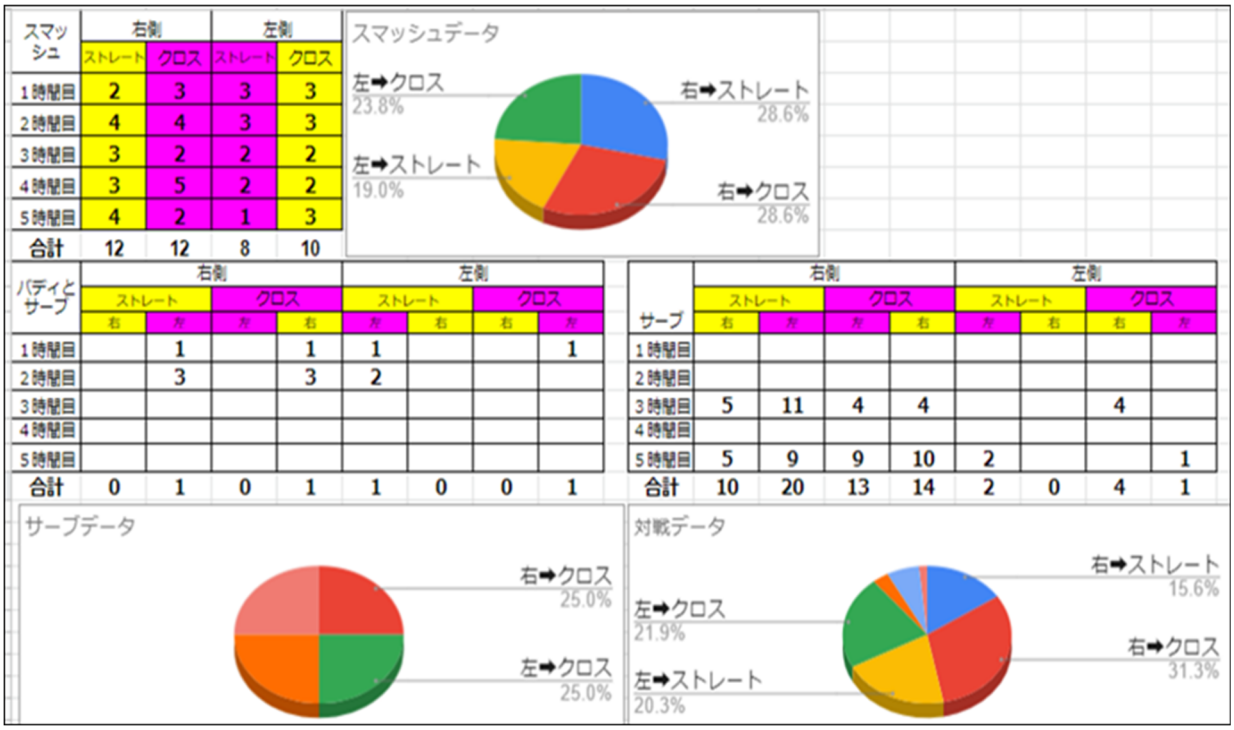
小規模校の課題としては、人数が少なく集団学習がしにくく、男女比や力関係も固定化されているなどがありますが、一方で、一人ひとりに目が行き届き、場や用具をたくさん使え、異学年や保護者・地域の方と一緒の授業を行いやすいという強みもあります。

澤辺先生からは、このような強みをフル活用することで課題を改善できる２つの事例を紹介いただきました。

１つ目は球技領域のゴール型の実践です。一般的にゴール型の授業はバスケットボールを取り扱いますが、忠類中学校ではバスケットボールを「３×３」に変更して行っていました。３×３を行うことによって、少ない人数でも攻守をパターン化でき、自分の役割が明確化されること、守備側がボール保持して攻守交代するルール変更を行い攻守の切り替えがわかりやすいこと、ゴール型の指導事項である「ゴール前の攻防」が常に起こり、学習の焦点化がしやすいなどの効果が見られたとのことでした。

２つ目として，同じく球技領域のネット型の授業で卓球の実践の紹介がありました。この実践では、攻撃パターンをデータ化し、それを用いた話し合い活動に取り組んでいました（図１）。授業では、卓球部生徒とそれ以外の生徒のペアでもデータを使ったことによって話し合い活動が活発になったとのことです。また、データを蓄積していくと、自分の技能の習得がわかり、そのデータから自分の得意なところ、苦手なところを知り、何に取り組んでいくかという自分の課題発見の手がかりにもなったとのことです。

最後に、小規模校には様々な課題はあるものの、工夫することと強みをフル活用することで様々な可能性があると述べられていました。



スマッシュ	右側		左側	
	ストレート	クロス	ストレート	クロス
1時間目	2	3	3	3
2時間目	4	4	3	3
3時間目	3	2	2	2
4時間目	3	5	2	2
5時間目	4	2	1	3
合計	12	12	8	10

バディとサーブ	右側				左側			
	ストレート		クロス		ストレート		クロス	
	右	左	左	右	左	右	右	左
1時間目		1		1	1			1
2時間目		3		3	2			
3時間目								
4時間目								
5時間目								
合計	0	1	0	1	1	0	0	1

サーブ	右側				左側			
	ストレート		クロス		ストレート		クロス	
	右	左	左	右	左	右	右	左
1時間目								
2時間目								
3時間目	5	11	4	4			4	
4時間目								
5時間目	5	9	9	10	2			1
合計	10	20	13	14	2	0	4	1

（図１）

4. 高瀬　淳也 先生の報告
用具･体育館を占有できるへき地校の強みを子供の体力づくりに活かす!

▲本学　高瀬淳也 准教授

北海道教育大学旭川校の高瀬先生からは「小規模小学校における教材の工夫と今後の課題」というタイトルでの話題提供があり、小規模校や少人数学級の良さとして、用具や教具、場を独占して使用できることについて説明がありました。

苫前町立古丹別小学校の宮木あかね先生による「爆弾ゲーム」の事例では、コートを９分割して番号を振ったことによって、児童は「〇番をねらおう」「〇番や〇番の方がいい」のように考えたことを友達に伝える手立てとして有効に機能しました。小規模校では教職員の数も少ないため意思疎通を図りやすく、この授業で使用したコートのラインもずっと貼った状態にしておくことができていました。

このように、体育授業で使用した場や用具を体育館に常設できると、休み時間にも子どもたちの遊びとして取り組むことができ、技能習得などの面でもとても有効と言えます。さらに、高瀬先生からは10名に満たない極小規模保育所では、体を動かしてどんな遊びをしているのかについての紹介もありました。事例として挙げられた極小規模保育所において、「なげる」「あてる」「とる」などの操作系の動きがほとんど見られず、全体的に出現した動作の種類も少ない状況が指摘されました。

へき地の研究として、幼児期にも目を向けていく必要性が指摘されました。

▲「爆弾ゲーム」の様子

フォーラムは盛況のうちに終了しました。たくさんのご参加をありがとうございました！